

名古屋外国語大学海外派遣プログラム成果報告書

2023年 9月 15日

学部・学科名 世界教養学部・国際日本学科

担当教員氏名 近藤 行人

1. 区分	中期留学 ・ 語学研修 ・ 海外実習
2. プログラム名称	ハノイ国家大学外国語大学日本語教育実習
3. 渡航先国名	ベトナム
4. 派遣期間	2023年 2月 27日(月) ~ 2023年 3月 10日(金) 12日間
5. 派遣先教育機関名	ハノイ国家大学外国語大学
6. 参加学生数	3名(金) 約2週間
7. 派遣目的	ハノイ国家大学外国語大学(以下、ULIS)学生を対象として、日本語授業の見学、現地での教壇実習を実施し、あわせて、異文化体験やULIS学生との交流の機会をもつ。
8. 派遣内容	① 事前指導 : 教壇実習で担当する予定の教授内容につき、授業計画立案、教案作成等を行い、指導を受ける。 ② 授業見学 : ULISにおける日本語授業 ③ 教案指導 : ULIS教員による教案指導を受ける ④ 教壇実習実習 : ULIS日本語学科の授業において、各実習生あたり8コマ分の教壇実習を行う。実習に先立ってULIS教員による教案指導を受け、実習後に批評・助言を受ける。 ④ 異文化体験 : ULIS学生との交流 ⑤ 実習報告書の作成

<p>9. 成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習の実施（授業見学、授業の実施、振り返り） 初級クラスの「文法」「会話」クラス、技能別クラス（「聴解」「読解」）、中級レベルの技能別クラスにて計 8 コマの実習を行った。実習生は自らの実現したい教育を目指した授業設計を目標に日本語授業を実施した。 ・ベトナム人学生との交流の実施 学内外において ULIS 学生との交流の機会を持ち、った。 ・報告書の完成 実習を通して学んだこと等をまとめ、報告書を作成した。
<p>10. 備考</p>	

以上

教壇実習報告書

ハノイ国家大学外国語大学で行った日本語教育実習を振り返り、工夫したことや改善点、考えたこと、学んだことを記録する。実習授業は文法（3コマ）と読解、会話、聴解（各1コマずつ）の計6コマで、学習者は1~2年生であった。

実習を行うにあたり、出発前の事前指導では自身の教育観や学習観、理想の授業像について話し合いを行った。私は、授業内での教師と学生間のコミュニケーション、学生同士のコミュニケーションを重視した授業を実現したいと考えており、学生の興味関心を引くトピックや学生同士が協力して取り組むことができるようなアクティビティを意識的に取り入れた。授業準備の段階で苦労したこととしては各活動の所要時間の予想が挙げられる。学習者の人数やレベル、積極性が詳しくわからない中で、限られた授業時間をどのように使うかを考えるのは非常に難しかった。そのため、時間が足りなかった場合に省略する部分や、時間が残っている際に追加で行う活動を事前に決めておくよう心掛けた。

授業を行ううえで意識したのは、明確な指示を出すこととわかりやすい言葉を使うことである。1つ目の明確な指示とは、練習問題やアクティビティの前に「どのように、どれくらいの時間で、何のために行うのか」といった学習をサポートする補足的な説明で、スムーズに活動に取り組んでもらうために必要だと考えた。しかし、指示がうまく伝わらず学生を混乱させてしまったり、想定より時間がかかったりすることが何度もあった。学生に申し訳なく感じ自信を失いそうになったが、そのようなときでも伝えることを諦めず、繰り返し説明するための心構えもまた重要であると感じた。また、2つ目に挙げたわかりやすい言葉を使うという目標を達成するため、教案作成の時点でどのような言葉を使って授業を進めるか大まかに決め、難しい言葉は簡単な言葉で言い換えたりわかりやすく説明したりできるよう準備を進めた。その他にも、教科書を読んで学生がすでに知っている表現を把握することで説明が必要な部分とそうでない部分を区別した。それでも説明が難しい場合には、英語を使用したり

わかっている様子の学生に発表してもらったりすることで、できるだけ多くの学生が理解できるよう努めた。

実習を振り返ると、学生にたくさん助けてもらいながら授業が成立していたことを感じる。例えば、私の説明が不十分だったときに素直にわからないと伝えてくれたり、学生同士で教え合ったり、私の発言に積極的に反応してくれたりが挙げられる。冒頭で述べたコミュニケーションを重視するという点でも、授業を通して学生がベトナムのことや学生自身のことを教えてくれたり、フレンドリーに話しかけてくれたりしたことで私が理想としていた授業に近づけることができたのだと思う。一方で、今回は私が理想とする授業の実現を重視していたため、学生にとっての理想的な授業を行うことができなかった。学生が何を学びたいのか、どのような活動をしたいのかということを想像したり、実際に尋ねたりすることができれば、授業の幅を広げることができたと考える。本格的に日本語を教えるのは初めてで緊張したが、2回目以降からは授業を楽しむことができるようになり、実習を通して教師としての自分をイメージできるようになった。慣れない環境の中で授業の準備を行うのは大変だったが、時間をかけて準備すればするほど学生の反応もよくなり、授業準備の重要性と教師という仕事の責任の大きさを学ぶことができる実習となった。

教壇実習報告書

私は、2月25日から3月11日までベトナム・ハノイのハノイ国家大学外国語大学で日本語教育実習をした。国際日本学科の日本語教育プログラムの一環だ。私は日本でベトナム人と関わる機会が多く、ベトナム人への日本語教育に興味があったため、いくつかある実習先の中からベトナムを選択した。名古屋外国語大学からは私を含む3人がここに赴き、それぞれ6コマずつ授業を担当した。具体的には文法授業を3コマ、聴解授業を2コマ、聴解授業を1コマおこなった。それぞれの授業で上手く言った点と上手くいかなかった点がいくつもあった。

文法授業は、『みんなの日本語』の第29課を担当した。文法項目は「～ています」「～てしまいました」でした。この授業で上手くいったことは、文法項目についての説明と学生の興味を惹くことです。文法項目については、同じ文型で複数の意味を説明することが難しいと感じた。例えば、「～てしまいました」は完了・後悔の意味があったので、その使いかたの違いを比較しながら教える必要があった。私はこの違いがはっきりと分かるように工夫した授業を行った。具体的には、板書や言葉だけの説明ではなく、場面が分かりやすいようなイラストや写真を使った説明をおこなった。説明を聞いている学生がハッと気づくような表情したときもあったので、説明は上手くいったのではないと思う。また、授業で使用するPPTのイラストに動きをつけたり、写真を加工したりすることで、学生が耳で聞くだけではなく、視覚的にも理解が深まるような授業をおこなえたと思う。学生が積極的に授業に取り組んでいた姿からも興味を惹く授業が出来たと思う。これらの授業での反省点は、時間配分が上手くいかなかったことだ。それぞれの授業内の活動で想定の間を越えることが多かった。また、想定よりも時間が超えてしまったときに修正することができなかった。一番やりたかったことができなかったり、あまり必要でない例文の提示で時間を取ってしまった。このようなときに臨機応変に対応する力と、事前に十分に準備しておくことが必要だと感じた。

会話授業は、『みんなの日本語』の第30課の会話を担当した。会話は非常袋についての内容だった。会話授業は文法授業と比較して進め方がはっきりしていなかったため、どんな授業にするか考えることが難しかった。教科書にある会話文をただ聞いて読むだけの授業では学生にとって、つまらなく学びの無い授業になってしまう。そのため学生が主体的に学べるような工夫をした。具体的には、会話を一度聞きなるとなくどんな会話だったか考えたり、学生自らが

会話文を作り練習したりする活動をおこなった。非常に自由度の高い授業をおこなうことができ、学生も意欲的に取り組んでいた。この授業での反省点は、指示が明確ではなかったことだ。それぞれの活動において、何分おこなうのか、何人でおこなうのか、何人が発表するのかという指示がはっきりしていなかったために、授業が滞るときがあった。特に初級授業では、ある程度学習者の活動をコントロールする必要があると感じた。

聴解授業では、聴解タスクの30課と『日本語生中継』の「交通手段」を担当した。これらの聴解授業では反省点が多かった。まずは音声を使う授業だったため、PPTに入れていた音声が上手く流れなかったり、音声が小さかったりという問題点があった。早めに教室に行き、準備はしていたもののこのようなトラブルが起きてしまった。本番を想定してより入念に準備をする必要があった。また、『日本語生中継』の授業は、3人で1コマずつ授業を担当した。私は1コマ目の授業を担当したが、時間配分が上手くいかず1コマの授業時間を大幅に超えてしまい、その後の授業を担当する実習生に迷惑をかけてしまった。また、自分の授業でも十分に説明できない点があった。文法授業でも授業時間の構成に悩んだが、聴解授業ではより考えなければならぬと感じた。また、今回の授業のように複数の教師がグループで授業を担当する場合には、予め時間の使いかたや内容の配分を十分に話し合う必要があるということ学んだ。

以上のような教壇実習を通して様々なことを学んだ。また、私は日本語教育の現場に立つこと自体はじめてだったので、貴重な体験になったと思う。今回の経験を、今後の日本語教育にいかしたいと思う。

教壇実習報告

2023年2月25日～3月11日の約2週間、ベトナムのハノイ国際国家大学で日本語教育実習をさせていただきました。将来、日本語教師になるか他の道に進むか悩んでいた自分にとってはすごくいい経験になりました。

教壇実習では主に1年生を担当し、文法3コマ、聴解2コマ、会話1コマを担当させていただきました。去年までの教育実習ではオンラインで行われていましたが、今年からは現地で教育実習がありました。現地に行ってみないとわからないこと、日本語を学んでいる学生たちと直接交流できることはすごく貴重な機会でした。

教壇実習ではうまくいったことよりも反省点が多く出ました。焦りと緊張で視野が狭くなることや自分が思っていたようにうまくいかないこともありました。主な反省点としては3つあります。

1つ目は、やさしい日本語をきちんと使えていなかったことです。日本語は私にとって母語です。だからこそ、その日本語を普段はなんとなくの感覚だけで用いることができてしまいます。私が伝わると思っている単語や文法が学生たちには伝わらないということがありました。日本語教育は日本語を学習者に教えるのと同時に、自分も学生の反応から勉強をすることができるものだと感じました。

2つ目は、自分が思っている通りにいかないときに焦ってしまったことです。当たり前ですが、学生たちは私が考えている通りに答えたり、動いたりしてくれません。聴解の授業の際に、学生たちにディクテーションをさせようとした際、しっかりと伝わらず、学生たちを困惑させてしまいました。この経験から私は、しっかりと何をするかを提示する必要があることを学ぶことができました。

3つ目は、時間配分です。50分という限られた時間内におさめることは難しいなと今回の実習を通して感じることができました。この経験から準備の大切さを学ぶことができました。準備をしっかりとすることでイレギュラーな出来事が出てきても冷静に対応することができます。授業以外でもこれから社会人として生活していく中で準備をすることはすごく重要だと思うので、意識していきたいです。

反省点ばかりでなくうまくいったこともたくさんありました。授業の準備をすることは強いプレッシャーを感じましたが、準備に時間をかけた分、授業がうまくいったときはとても嬉しかったです。学生たちがすごく楽しそうに授業

を受けている様子を見たり、「またベトナムに日本語を教えにきてください」と声をかけていただいたときはすごくうれしい気持ちになりました。改めて日本語教師は大変な職業だが、その分やりがいもたくさんある職業だと感じました。

今回の実習では実際に教壇に立つことの難しさや楽しさ、日本語教師という職業のやりがいなどを感じることができました。正直に言うと、生活面での環境はトラブル続きで決して快適とはいえませんでした。様々なトラブルが起こり、すごく大変でした。しかし、担当の先生や学生たちに助けをもらいなんとかやり遂げることができました。この実習から、教師側から見た教室や授業について、異文化交流などたくさんのことを学ぶことができました。この 2 週間の経験は私の今後の人生においても大きな財産です。